



IT化でコミュニケーションは変質するか？

■ 平田 オリザ

「コミュニケーション教育」という、何やら胡散臭い、そして実態のつかみにくいものにかかわって十年以上になる。その是非はともかく・・・などと気楽なことを書いているうちに、世間の「コミュニケーション能力」に対する要求と欲求は肥大化し、それに比例して頼まれる講演やワークショップの量も、尋常ではない数になっている。

そのような講演会の質疑の時間で、必ずといっていいほど聞かれるのが、「IT化によって、子供たちのコミュニケーションはどう変わっていくのでしょうか？」という質問だ。あるいはもう少しネガティブに、「子どもが携帯ばかりいじって直接コミュニケーションをとらなくなっている。けしからん。こんなことで日本は大丈夫か？」といった嘆きも多い。中高校生対象のワークショップでは、「僕たちは、ネットとかのコミュニケーションが多いので、大人になってから心配です」といった切実な声もある。

結論から言えば、「大丈夫でしょう、たぶん」としか答えようがない。中高校生からの質問に対しては、「あんまり大人の言葉に惑わされない方がいいよ」という答えもあるだろう。この問題に関して、良心的な（マスコミへの迎合を望まない）社会学者や言語学者の見解は、ほぼ共通しているように思う。

「新しいツールができたからといって、人間のコミュニケーションの本質は変わらない」

私は、中高校生には、以下のように説明する。

(C) 平田オリザ

■ 平田 オリザ
東京藝術大学特任教授

1962 年東京生まれ。劇作家、演出家、こまばアゴラ劇場芸術監督、劇団「青年団」主宰、大阪大学客員教授、四国学院大学客員教授、学長特別補佐。1995 年『東京ノート』で第 39 回岸田國士戯曲賞、他受賞。2011 年フランス国文化省よりレジオンドヌール勲章シュヴァリエ受勲。平田の戯曲はフランスを中心に世界各国語に翻訳・出版されている。2002 年度以降国語教科書に採用された平田のワークショップの方法論に基づき、年間 30 万人以上の子供たちが教室で演劇を創作している。



私たちの世代は、親から「長電話をするな」といって育てられました。君たちには信じられないかもしれないけど、家には「イエ電」1つしかなかったから、子どもが長電話すると本当にみんな困ったんですね。私たちの親は、「最近の子はなんでも電話で済ませる、嘆かわしいことだ。もっと手紙を書きなさい」と口やかましく言いました。それがいまでは、「メールばっかりしないで、ちゃんと電話しなさい」と言います。親はいつも勝手ですね。たぶん「手紙」が発明されたときも、「手紙など書かずに、直接会いに行け」と言った親がいたことでしょう。新しいコミュニケーションツールが出てくると、前の世代は、拒否反応を示します。それは人間の性（さが）のようなものです。いまは、たとえば LINE の使い方とかが問題になっていますね。もちろん、新しいツールが登場すると、その混乱に乗じて悪用しようとする人も出てきます。ルールが定まっていないので、間違った使い方をする人も出てきます。そうした混乱を経て、人々は新しいツールの使い方を学び、創造していきます。ただ、いまは、ツールの出方が早くなっているの、ちょっと混乱しやすいということとも言えるかもしれません」

問題の本質が、ここにはないことは明らかだ。では、どこにあるかと言うことは、この短い紙数では書き切れないのでまたの機会とする。

